様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月３０日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：　2010～2012
課題番号：２２７３０５３８
研究課題名（和文）　問題行動及び学級の荒れを抑止する教師の関わりについての研究

研究課題名（英文）　A study of teacher’s supports for students preventing their problem behaviors and school disrupt.

研究代表者
加藤　弘通（KATOU Hiromichi）
静岡大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：20399231

研究成果の概要（和文）：本研究では、児童生徒の問題行動及び学級の荒れを抑止する教師の指導のあり方を明らかにするために、予備調査として(1)教師のかかわりについての自由記述を収集し、(2)中学生を対象に予備調査及び尺度構成を行った。本調査では、生徒指導上課題を抱える小学校と中学校を対象に、どのような教師の関わりが小中学生の問題行動及び学級の荒れを抑えるのかを検討した。

研究成果の概要（英文）：This study was aimed to examine what type of teacher’s support for student prevent student’s problem behavior and school disrupt. By conducting three researches, it was clear that several teacher’s supports, for example “listen carefully talk of student” and “give a lot of advices for student”, have an effect that prevent student’s problem behavior and school disrupt.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	900，000	270，000	1170，000
2011 年度	500，000	150，000	650，000
2012 年度	900，000	270，000	1170，000
年度			
年度			
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：臨床心理学
キーワード：問題行動、学級の荒れ、生徒指導、教師の関わり

１．研究開始当初の背景

小学校・中学校において、児童生徒が起こす様々な問題行動や授業や行事が成立しない学級崩壊といった現象に悩まされることがよくある。しかし、学級の荒れといった集団的な問題を扱った研究は少なく、その多くは、個人が起こす問題行動に対する研究から得られた成果を、集団の問題に応用するものがほとんどであった。

また、その多くは問題行動や学級の荒れに関する要因については明らかにしてきた。例えば、学校教育の文脈で言えば、教師との関係の良さは、問題行動の抑止要因となるなどである。しかし、具体的にどのような教師の関わりが、教師－生徒関係を改善し、問題行動の抑止につながるのかという具体的なレベルでの研究は蓄積が不十分であった。研究の成果を教育現場に返していくためには、現場で必要とされる水準で、成果を明らかにしていく必要があるだろう。

以上のような従来の研究がもつ問題点と課題を踏まえ、以下に示すような目的を設定

した。

２．研究の目的

本研究の目的は、「生徒個人が起こす問題行動と学級の荒れといった集団の問題を分け、具体的にどのような教師の関わりが、それらの問題を抑止するのかを明らかにすること」である。

そのために具体的には以下の課題を設定した。【研究Ⅰ】教師の関わりに関する自由記述を収集する。【研究Ⅱ】収集した自由記述をもとに、尺度構成し、【研究Ⅲ】実際に学級の荒れが問題となり、生徒指導上の困難を抱えている小学校・中学校で実施し、どのような指導が問題行動および学校の荒れの抑止に有効であるのかを検討する。

３．研究の方法

【研究Ⅰ】予備調査として大学生 120 名、中学生 1～3 年生 507 名を対象に「教師からされて嬉しかった（嫌だった）関わり」についての自由記述を収集した。

【研究Ⅱ】予備調査として中学生 1～3 年生 360 名を対象に「教師のかかわり」に関する質問紙調査を実施した。

【研究Ⅲ】本調査として、小学校 5・6 年生 615 名、中学生 1～3 年生 964 名を対象に、「教師のかかわり」「学級の問題行動への規範意識」「学校享受感」「問題行動の経験」「教師との関係」「学級の荒れ」などに関する項目を含んだ質問紙調査を実施した。

４．研究成果

研究Ⅰから収集された自由記述より、「生徒の話や意見をよく聞いてくれる」や「アドバイスをたくさんしてくれる」といった 20 項目からなる「教師の関わり」尺度を作成し、実施した。それに対し因子分析を行った結果、１因子構造が妥当と解釈される結果になった。

この尺度を用いて、生徒指導上の困難を抱える小学校 3 校、中学校 2 校に対し、本調査を実施し、生徒個人が起こす問題行動の抑止に有効な教師の関わり、学級の荒れの抑止に対し、有効な教師の関わりについて検討した。

(1)問題行動を抑止する教師の関わり

Table1 問題行動を抑止する関わり（小学生）

生徒の話や意見をよく聞いてくれる	-0.34**
アドバイスをたくさんしてくれる	-0.30**
よくほめてくれる	-0.28**
生徒が起こす問題にすばやく対応してくれる	-0.28**
「できない子」や「力の弱い子」にも丁寧に接してくれる	-0.27**

Table2 問題行動を抑止する関わり（中学生）

生徒の話や意見をよく聞いてくれる	-0.32**
生徒を信頼して、いろいろ生徒にまかせてくれる	-0.31**
自分の間違いを認める	-0.31**
生徒のケガや命の安全に気を配ってくれている	-0.30**
アドバイスをたくさんしてくれる	-0.29**

問題行動を抑止する教師の関わりを検討するために、問題行動の経験と教師の関わり各項目との相関係数を求めた。Table1 と Table2 は、学校種別に問題行動を抑止する教師の関わり上位 5 つを示したものである。

小学生、中学生に共通しているのは、「生徒の話や意見をよく聞いてくれる」「アドバイスをたくさんしてくれる」という関わりであった。また小学生に特有なのは、「よくほめてくれる」「生徒が起こす問題にすばやく対応してくれる」といった関わりであるのに対し、中学生では、「生徒を信頼して、いろいろまかせてくれる」「自分の間違いを認める」といった関わりであった。

小学生がどちらかというと教師から自分に向けて何かしてもらうことを求めているのに対し、中学生の場合は、信頼して任せてもらえるや教師自身が否を認めるといったように、自分自身に何かしてもらえることとは異なる側面を教師に期待し、それが問題行動の抑制につながっていることが理解される。

(2)学級の荒れを抑止する教師の関わり

学級の荒れを抑止する教師の関わりを検討するために、学級の荒れ尺度の得点により、学級を一般学級・中間学級・困難学級に分類し、困難学級と一般学級で、どのような教師の関わりが、学級における問題行動に関する規範意識に影響するのかを検討した。

小学校の一般学級と困難学級それぞれにおいて、学級における問題行動に対する規範意識と教師の関わりの相関係数を求め、その値から児童の規範意識を向上させ、学級の荒れを抑止する上位 5 つの関わりを比較した（Table 3、Table 4）。

その結果、一般学級では、勉強のことや問題へ素早い対応などが規範意識を高め、問題行動を許容する雰囲気を作ることを抑止し、学級の荒れを予防することに資することが

分かった。
　それに対し、困難学級では、毅然とした対応や積極的な雰囲気づくり、肯定的な声かけが、児童の規範意識を高め、問題行動を許容する雰囲気を抑止する方向に働いていることが分かった。

Table 3　一般学級における規範意識を高める教師の関わり（小学生）

授業時間以外でも勉強を熱心に教えてくれる	0.40**
生徒が起こす問題にすばやく対応してくれる	0.40**
生徒の話や意見をよく聞いてくれる	0.34**
アドバイスをたくさんしてくれる	0.34**
生徒が起こす問題に対してどんな生徒にも厳しく対応している	0.31**

Table 4　困難学級における規範意識を高める教師の関わり（小学生）

いけないことをしたときにきちんと叱ってくれる	0.44**
積極的に学校を良くしようとしてくれている	0.43**
よくほめてくれる	0.42**
生徒のケガや安全に気を配ってくれている	0.36**
生徒が起こす問題にすばやく対応してくれる	0.33**

　同様に、中学校の一般学級と困難学級それぞれにおいても、学級における問題行動に対する規範意識と教師の関わりの相関係数を求め、その値から児童の規範意識を向上させ、学級の荒れを抑止する上位５つの関わりを比較した（Table 5、Table 6）。
　その結果、一般学級では、積極的な雰囲気作りや面白い授業、教員同士の関係といったことが生徒の規範意識の向上に影響し、学級の荒れの予防に資することが分かった。
　それに対し、困難学級では、生徒の安全やアドバイスや肯定的な声かけをすることが規範意識の向上に影響し、学級の荒れを改善することに資することが分かった。
　特に中学校における一般学級と困難学級の違いをまとめると、一般学級では、授業や雰囲気づくりといった学級全体への関わりが、規範意識の向上には有効で、困難学級では、安全やアドバイス、ほめるといった生徒個々への関わりが規範意識の向上にとって有効であることが分かった。

Table 5　一般学級における規範意識を高める教師の関わり（中学生）

積極的に学校を良くしようとしてくれている	0.32**
生徒がおもしろいと思う授業をしてくれている	0.32**
先生同士の仲がよい	0.31**
「できない子」や「力の弱い子」にも丁寧に接してくれる	0.31**
生徒が起こす問題に対してどんな生徒にも厳しく対応している	0.31**

Table 6　困難学級における規範意識を高める教師の関わり（中学生）

生徒のケガや命の安全に気を配ってくれている	0.44**
アドバイスをたくさんしてくれる	0.44**
よくほめてくれる	0.42**
「できない子」や「力の弱い子」にも丁寧に接してくれる	0.44**
生徒の話や意見をよく聞いてくれる	0.43**

(3)まとめ
　以上の結果から、生徒個人が起こす問題行動の抑止には、小学生の場合、「生徒の話をよく聞き、アドバイスをたくさんする」といったことに代表される教師の関わりが、中学生の場合、「生徒の話をよく聞き、生徒を信頼し任せてくれる」といったことに代表される教師の関わりが有効であると考えられる。
　また学級の荒れに関しては、小学生の場合、予防という面では、「授業外の勉強の支持や問題への素早い対応」が有効であり、対処という面では、「いけないことをしたときにきちんと叱ることや積極的な学級の雰囲気づくり」が有効であると考えられる。
　それに対して、中学生の場合、予防という面では「学級の雰囲気づくりに加え、面白い授業、教師同士の良好な関係づくり」が有効であり、対処という面では「安全への配慮やアドバイスをたくさんすること、ほめる関わ

り、また弱い子への配慮」などが有効であると考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）
加藤弘通・太田正義　問題生徒はクラスメイトの規範意識をどう認知しているか　日本教育心理学会第 55 会総会(法政大学(東京))、2013 年 8 月 17－19 日

６．研究組織
(1)研究代表者
加藤　弘通（KATOU HIROMICHI）
静岡大学大学院教育学研究科・准教授
　研究者番号：20399231

(2)研究分担者
　　なし　　（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　なし　　（　　）

　研究者番号：